

昭和
和和

二十四
四十三
三年

十七
月二十
三日

第三
行(種
郵便
物認
可
每月
一回
・十
五日
發行)

(通第
二三
三號)

慈光

第二十卷

第十号

目

次
627.24
②

信 仰 の 悦 び 近 角 常 観 (1)

仏 智 の 不 思 議 麻 生 介 (6)

アメリカの仏たち (二) 西 元 宗 助 (16)

歎 異 鈔 第 四 章 花 田 正 夫 (19)

信仰の悦び

近 角 常 観

信仰とは何ぞや

信仰といえは、世間では、一往、仏を信心することや、仏をたのむことのようなれど、真実の信心というは、心の底より夜の明けることである。今までの凡夫の闇の心の中に、仏の慈悲の光明が射し込んで、信心の晝に達することである。要するに心の革新をすることである。人間の建て直しをすることである、人生の生れかわりである。

自覺、覺他

全体仏教ということが、そもそも人間の生れかわりの教である。仏というは覺である、覺というは先ず自覺することである。釈尊も降魔成道（こうまじようどう）したまいて、無明の闇を破り、煩惱の悪魔を退ぞけて、大光明を放ちて成道したまいたのである。かく御自身が自覺されたるのみならず、一切衆生を覺他（かくた）せしめたまうのが仏教である。しかもその自覺と覺他が徹底して一切衆生を

救済し尽くさねばならぬというのが仏の本願である。

信心歡喜

故に仏教を信仰するというは、その仏の光明に照らされて、従来の迷いの人生をひるがえして、新しい仏の光明の生活に入ることである。その仏の光に照らされたとき、我々の心が開發して天に踊り、地に躍るほどの喜びを生ずるのである。これが信仰の喜びであらねばならぬ。それゆえ、一時的によるこぶことではない、主觀的に感情的によるこぶこともない。心の底より生れかわりて、今までの間違つた人生を捨てて新しい生活に入ることである。ゆえに真実の信仰に入りて真人間の生活（まことんご）をいとなむことが出来るのである。

人生の消極と積極

このように信仰は人間の生れ変わりであって見れば、先ず

人生の暗黒なることに気がつかなければならぬ。

門松や冥途の旅の一里塚

芽出度くもあり芽出度くもなし

一休和尚が、元旦早々、縁起でもないことを言い廻されたのも、先ず人生の暗黒の方面を知らせるためである。良薬口に苦し、諫言耳に逆う。芽出度くもあり、芽出度くもなしというのが甚深微妙の味の存するところである。人間は人生の喜ばしき積極的の表面のみを見て、その消極的の暗黒の反面を見ない、それだからすぐに足元をさらわれるのである。

眞の芽出度さを知るには、先ず芽出度くない方面に目をつけねばならぬ。眞の喜びを知るには喜ばれぬ方面を考えてかからねばならぬ。峨山和尚（総持寺第三代）は、相模を取るには先ず、臥て相模をとれ、と云われたとのことである。臥てかかれれば足元をさらわれ、おそれが無い。進むことを知りて退くを守らないものは猪武者である。

常・楽・我・淨

人生に対して何人も望むところは、常、楽、我、淨である。常というのは常住（じようじゆう）である、永久なることを欲するのである。何時までも変りなく、眞実ばかりでありたいのである。しかし、たとい如何に哲學的に眞実

を求めても、人間界にこれを望むべからざることである。

次に樂というは何人も常に楽しみばかりを欲するのである。物質的欲望、肉体的享樂、たとい精神的快樂にせよ、芸術的趣味、人間的情操にせよ、如何に人生を樂しまんとすれども、遂に裏切らるるに至るものである。

また何人も自我の思うままにしたいものである。現代思想の如きも常に自我を主張して、遂に闘争をもって人生を解決せんとすれど、自分が我を主張すれば、相手も我を主張するものである。我と我の角の突き合わせでは、永久自分の思うようにならぬものである。

淨というは、この人生を清淨なるものと考えているところだが、人生は甚だ穢れたる世界である、現代の青年はこの人生に向つて清淨なる理想を實現せんとして、かえつて穢れたる人生を持来することになるのである。

苦・空・無常・無我

かくの如く人生に直に常、楽、我、淨を求めんとするも不可能である。これを仏教の上では、凡夫の四顛倒（してんとう）と称し全くあやまれる、さかさまの見方であるといましめるのである。

そもそも釈尊が王城を出でて出家したまいたる動機に、四門を出でて老人を見、病人を見、死人を見て無常を感じ

られたのが根本である。

色は匂えど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ、有為（うゐ）の奥山今日越えて、あさき夢みじ酔いもせず。花咲き鳥歌い色におい、春うららかなりといえども、やがて散り行く無常の人生である。して見れば生は苦なり、老は苦なり、病は苦なり、死は苦なりというのが、そもそも苦、空、無常、無我の真理である。

人生の消極を見ずして積極ばかりを見ている人間の四顛倒をいましめて、苦、空、無常、無我を説かれたのが釈尊の説法である。

現代の青年も自我主張では最後の平和の實現出来ぬことを自覚せねばならぬ。そこで無我の世界を實現したいものである。

ところがなかなか無我になり得ないものである。無常の世界であると分かつたところで、結局苦しいばかりではないたしかたない。消極のない積極の人生観、即ち、常、楽、我、常の見解が凡夫の四顛倒であると同じように、たとい仏教をききて人生の苦痛をうつつたえ、無常に泣いているばかりでは何の所詮もない。

とかく仏教の消極の一面のみをみて悲觀したり、厭世思想におちいるようなものは、仏教を聞きながら徹底せざるものである。このような聞き方をしたのを小乗（しょうじ

よう）仏教というのである。釈尊が小乗を説かれたのではない、聞き方が不徹底なるゆえに小乗になったのである。

小乗と大乘

小乗といえは歴史的に原始仏教のことと考えるであろうが、なかなかそうばかりではない。日本などは聖徳太子が日域大乘相應地（にちいきだいいじようそうおうち）と仰せられて、教理的に云えば大乘仏教ばかり行われているけれど、信仰的にいえば不徹底な聞き方をしたり、説きかたをしている小乗の人ばかりである。

小乗の人々を声聞（しょうもん）とか、縁覺（えんかく）とかいうて昔から排斥するのであるが、今でも仏教のきまり文句の説法の声ばかり聞きて、その真理をさとらぬ人は声聞である。一寸したはずみに悟つたような心持になつて得意になっている人は縁覺である、独覺である。正月早々、無常や無我の話を聞かされて縁起をかつぐ人は、この不徹底な聞き方をした小乗仏教である。

しかるに、この消極的の苦、空、無常、無我の人生に対して飽くまでこれを救済すべくあらわれたる積極的の教が大乘である。

無常の人生に対して如来常住の光明があらわれた。苦しき人生に対して極樂世界があらわれた。如何にしても我を

捨つることが出来ぬ我等に対して無我の仏があらわれた。この穢れたる社会に対して慈悲の浄土があらわれた。かくの如く凡夫の四顛倒の常楽我浄をすてて涅槃の四徳たる常楽我浄の如來の慈悲があらわれたのである。これが大乘仏教の極致でなければならぬ。

闇黒の世界

我等凡夫が本來のぞむところの常楽我浄なるものは、一旦破壊さるべき運命を持つものである。現代青年が抱ける理想なるものは、ひとたび行きつまるべき相対的のものである。何人といえども自分は正しいものと考えていられども他人は亦自己を正しいと考えているものである。つまり是非善悪なるものはお互いさまであって、結局五分五分の争闘であらねばならぬ。

自分は一身を犠牲にして顧みない、一点名利の心を持たぬと考えるものも、最後になれば人に認められないことに煩悶したり、自分の努力の水泡に帰することに残念がるようになる。つまり人に認められたい心は名利ではないか、我こそと思うところは無我になり得ない、我のころである。ついには人を怨んだり、世をのろふたり、様々の心がおこるようになる。ここにいたって理想は破壊し、人心の破産がくる。釈尊が菩提樹下に端坐せられたるとき、もろ

もろの煩惱の悪魔にかこまれ、無明の闇黒に覆われたまうたというのもこれである。善導大師の食膿二河（とんじんが）の譬喩に群賊悪獸おそい来たりて、往くも、還るも、止まるも一として死をまぬかれずというもこれである。私なども三十余年前白川党本願寺改革問題のとき、ひとたび大煩悶におちいりて大死一番、ついに絶対の大光明に接したのである。

絶対の大慈悲

上記のごとき闇黒の場合において、我等の心持を理解して、如何ともなすべからざる有様をあわれみて、飽くまで見捨てぬ友人に遇いたい、かくのごとき友人は一人で十分である。そのかわりには、その友人は如何なる場合でも、また如何程悪しくとも、どこまでもあきれぬ友人でありたい。友人と云うよりも絶対の同情者というべきである。つまり慈悲のかたまりで、どこまでも私を撰取せねばやまぬという人格でなければならぬ。これが即ち仏陀である、如來である。

仏はこれ満足大悲の人なるが故に仏心とは大慈悲これなり、その慈悲が光明であるその仏の親心が本願である。その親心が我等に徹到したのが信心である。その信心開發の

一念に踊躍歡喜の心が起こるのである。親鸞聖人の和讃に

尽十方の無碍光は

無明のやみをてらしつつ

一念歡喜するひとを

必ず滅度にいたらしむ。

無碍光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱の水とけ

すなわち菩提の水となる。

罪障功徳の体となる

水と水のごとくにて

水おおきに水多く

障り多きに徳おおし。

これがやがて、煩惱即菩提、生死即涅槃の大乘仏教の真髓を極めたもので、信仰法悦の高調に達したものである。同じく浄土和讃に

慈光はるかにかぶらしめ

光の到るところには

法喜をうとぞのべたまう

大安慰を帰命せよ。

ここにはじめて信仰的の新年の法喜法悦があふれ、世界にみなぎりきたるのである。

信仰と秩序

かくして人生が信仰をもって建て直さるのである。秩序ある世界が顕現するのである。かくの如く絶対の慈悲に救済せられて、罪惡自覺の念を生じ、ここに上下秩序の觀念があらかとなるのである。聖徳太子の十七憲法に「君則（くんそく）これを天とし、臣則これを地とす」という君臣の大義があらかにかがやくのである。あだかも富士

の山が三角形をなして千古動きなき姿をあらわす如くである。この徹底せる信仰によって如何なる惡逆の者といえども、廻心懺悔（えしんざんげ）して正しき道に立ちかえるのである。

奥山に折枝り枝折るは誰がためぞ
親の身すててかえる子のため

この歌は私が幼少の時、父が姥捨山のお伽話をして教えてくれた道歌である。親が子のために結んでくれた道しるべを破壊しながら、親を奥山にはこんで捨てようとした不孝の子がはじめて親の本心を聞いて、あやまり果てて、捨てた籠に再び親を乗せて帰り、孝行を尽くしたとの話である。絶対の大悲に救われて嚴肅なる道徳が建現して来る有様である。

これは私が九歳のときいた話であるが、六十二歳の今日（大正六年）これ以上の信仰の徹底を味うことは出来ぬ。大谷派本願寺が前法主に対して不秩序の行動をなしたるは、さながら姥捨山の実演である。本願寺が教化団体として不孝の惡手本を示したものである。……一刻も早く大谷派本願寺は従来の不孝の罪を謝し、前法主の位置を回復して、正道に立帰るべきである。ある人の歌に、

跡戻り／＼して辿るらん

甲斐なきことに心迷いて

これ信仰生活の基調であらねばならぬ。

仏智の不思議

麻生介

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

私は今回、北里研究所の古賀氏結核療養法講習のために東京に参りましたが、それは表面の目的で、実は先年私が東京に居ました時、御恩のある師長に対して相済まぬことがありましたので、そのお詫をしたいのが真の目的でありました。元来私は大正元年から別府で開業して居る者でありますが、大正二年の仏教夏季講習会が別府の西法寺でありました時に、近角先生の人生問題と歎異鈔の御講話によって、初めて大悲のやるせなき思召しに気づかせて頂いた者であります。それですから私が今回師長にお詫をするについては、先ず第一に近角先生にお逢いして、一つには先年の御教化の御礼も述べさせて頂き、又一つにはお詫の方法についても、御教示を仰ぎたい考えでありました。つまり子供が父親に叱られておむねをする時、母親のさしずに従うような心もちで、先生をお訪ねしたことでありま

す。

その時先生はお風邪でありましたが、私がお伺いすると御親切にも玄関までお出迎下さいましたので、今更ながら嬉しさが胸に満ちてまいりました。一室に導かれて、先生とさし向いになりました時は、最早暖い慈母の懷にあるの思いがしました。そこで私の過去の罪惡も煩悶も、仏のお思召の有難かったことも、何もかも打ちあけて申しあげましたから、時間の経つのも忘れてしまいました。

先生も私の入信を非常にお喜び下さいまして、帰った上では告白を書いてよこせという仰せでありました。私は筆さえたては喜んで書かせて頂くのでありますが、とても人様に読んで頂けるようなことは書けまいと思って、どうしようかと考えましたけれども、マ―書いて見ましようとお受けをしました。そのうえはともかくも書きますので、若し求道誌上にお出し下さるようなことがありましたら、何卒皆様に御判断、御推読をお願い致します。

二

私が入信の動機とも申すべきものは、実に家庭問題であります。従って先ず私の家庭の状態を申上げて、自然に信仰のことに移りたいと思います。

私は肥後の国の生れで家は頗る貧しい方でありました。

兄は早くから師範学校に入りましたので、次男に生れた私は十八歳まで家業の手伝いをしておりました。十八歳で初めて東京に出て医学に志したのであります。もとより学資を送って貰うというわけではなく、或時は小使となり或時は医師の書生となつて勉強しました。ところが親戚の人から養子に行くことを勧められ、先方は資産があるから卒業した上は医者かはやらなくても生活には差支えはないのだ村の便利をはかるために、医師を養成したいという話でした。私は養子というものは面白くないと聞いて居りましたから、一応ことわりましたけれども、再三勧められたので、両親の意にまかすことにしました。両親はじめは承諾しませんでした。が、親戚からしきりに勧められたので遂に或条件のもとに私を養子には遣ふことになりました。

私は麻生家に入籍してから、三四年の後に養家の長女と結婚して湯の平で開業することになりました。もとより狭い村ではあり、私の技術がまずいと来て居るから、医業だけで生活が出来ないので、養家から多大の補助をうけて居

りました。ところが四五年を夢の間に過してゐるうちに、妻は大病にかかつて遂に鬼籍に入ることになりました。た。これからが私の一身上に大波瀾が始まりました。

私は妻の死亡した時、後妻を他から迎えることは、将来のためでないと置いてこぼしましたけれども、養家からしきりに勧められるので、とうとう義理にせまつて貰いました。ところが月日のたつに従つて養家の待遇もだんだん面白くない、今までの補助もしなくなるといふ有様であるから、かかる片田舎でグズグズして、養家をあてにして居ては、行末が案じられる、安閑としてゐる場合ではない。養家には実子も沢山あるから、私が初め養子に來た時は、家督を相続さすといふ話であつたが、今は妻が死亡した結果、少しも血縁がないのでそれもあてにはなるまい。それかといつてこの狭い村に居ては医業だけの収入で将来妻子を養育するといふことは到底不可能である。それでは他の有望な土地に出かけて開業することはどうかというに、それは養家が断じて許さない。ここに至つて私は進退これきわまるという苦境に陥つた。妻の生存中は彼をたのみとし養家をあてにして居つたが、今は昔の夢となつたのであります。

或時私は養家に対して「私がこの村に安心して、医術を開業して居られるだけの資産を分けて呉れるよう」に願つ

たこともあるが、それでもないませんでした。この際私が養家に対する義理を打ちすてて飛び出すことが出来れば苦しむことはないのですが、それは私に出来ない。つまり他には行かれず、養家はあてにならず、土地では発展の余地がないと思つて非常に煩悶しました。天、我をたすくるの神なきや、地、我を救うの人なきやという嘆声をもらしたの、この時であります。

しかしもうこうなつたら仕方ないから、出来るだけ働いて見ようと決心して村内だけでは戸數百戸未滿で土地が狭いから、非常な山越して約三里程ある阿蘇野というところに出張所を設けて、月に六回行くことにしました。出張日には午前三時頃から起きて出かけるので、鴉声か川の瀬の音につれて聞こえるばかり、田伏という二三軒人家のある処を過ぎると、全く人里を離れた峠である。その峠が鎌ヶ台といつて、私には忘れることの出来ない苦闘の戦場であります。その峠を八合目ばかり登つて、後を振りかへつて見ると、中津留という処に人家の灯火が遠くかすかに見える。私は何時もその灯火を見て自分の身の上を考えたことがある。自分はこれまで随分苦しんできたが、前途に何等の光りを認めることが出来ない。今中津留の人家に灯火が見えるように、前途に一点の光明を認めるのは、何時のことであらうかと。

所を替えて、同職の人から笑われたこともあります。「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し急ぐべからず」という家康の遺訓もありますが、そういう場合は金言も何も忘れがちであります。しかも信仰のない時は、人の善いことよりも悪い点が目につくものでありますが、タトヘ名高い学者でも、人間である以上は、その行いの全部が善いというわけにはいけません。そこでよくない点によく目のつく私は、(人生のみを見ているから)知らずしらずの間に浅間しい心になつたかと思われまします。

「かばかりのことは浮世のならいぞと、心にゆるすはてぞくるしき」一体私も初めから悪くてもよいという考えは毛頭ない。二宮翁の報徳記、福沢翁の百話、及び修業立志篇、黒岩涙香の精神主義等を読んで、修養の方面にも多少は心がけた積りであります。其当時の随感録を開いて見ると、小心翼翼しやうしんようよくもつて大功を期すべし、たのむべきは唯自家の才力あるのみ。神は汝を救うの力をただ汝の手にのみ托し置けり。汝自身の力をもつて自ら救え。我を救う者は我なり、などということが書き取つてあります。

然るに今はその修養書が一つも役に立って居ない、善くしたい／＼で却つて悪くなつたことに驚きます。私は自分の行為が実は浅間しかつたと気づいてから、穴にでも入りたいような後悔のおもひに堪えず、自分は悪いことをした

私はこうして努力して見たけれど余りおもわしくない、そのうちに阿蘇野にも別に医師が出来て一層つまらなくなり、おまけに子供は一人殖えて来そうになりました。こうなつてはこのまま湯の平に安閑として居ることは出来ない困つたことになつたと毎日々々煩悶して居りました。私はその時、こういう折は尋常なことをして居つては到底ラチはあかない、何とかしてこの難関を切り抜く手段を講じなければならぬと思つた。そこで先ず何処へ行つて開業しても差支えないように、自分の腕前を磨くことが一番急務である、それには自分の趣味をもっている細菌学を修めておいたならば、将来のためになるうと考えて、予て知つていた師長に、現在の窮状と将来の希望を認めた手紙を出しますと、病院に勤めてかたわら研究してよいという返事を頂き丁度暗夜に一点の光明を見出したように思いました。そこで養家には三ヶ月ばかり東京で研究して来るといつて湯の平を出ました。それは研究のために永い間留守をすることは養家が許してくれないからであります。私が東京に出た翌年頃、湯の平には非常な大火がありまして、養家など殆んど丸焼けになりました。

さて私は東京で細菌学は一通り研究いたしました、生活の方は相変わらず苦しかった。そこで病院に勤める余暇で開業しましたが、一向におもわしくない、そのために再三場

実に相済まぬ／＼と思つて煩悶して居りました。私の煩悶に対して同職の方や友人は「君そんなに心配したまうな、成程君の行為もよくはなかったが、よく世間にありがちのことだ」と慰めてくれます。つまり悪いけれども心配するなと云つてくれるのでありますが、私はもとより一向安心は出来なかつた。この私に対する仏の仰せはどうであるかは、後になって述べさせて頂きます。

とにかく私は善くなりたい／＼で修養書なども見て居つたのに、却つて悪くなつて、そのため煩悶の淵に沈みました。論語読みの論語知らずとは、余程味わいのあることと思われまします。

さて私は東京にも永く居ることが出来なくなり、大正元年の暮に、この別府に帰りました。そして直ぐ開業の準備に取りかかりましたが、もとより資本は無し、知るべは居らず、家賃なども東京と変らぬ位で困難しました。或る旅館の一室で考えこんで居りますと、遠い浜辺の波の音さえも、私の胸の内をませかえすように感ぜられました。

三

話が前後しますが、開業する前にチョツと湯の平に帰つて人の話を聞くと、養家では私の留守中に戸籍を変更して私には相続権をないようにしたといふことであります。私が養家に入籍した当時は、男子(私にとって義弟)が一人

あつたけれど、私の先妻に世を継がしたいというので、生れおちると同時に隠居の子として入籍してあつた。そして養家の人等も、先妻の生存中は、先妻や私をして世を継がすように申して居られました。それなのに養家では、先妻の死亡後は段々と待遇も悪くなった上に、裁判所に手続きして相続権までもないことにしたのであるか。それでは黙って居るわけにいかないと思つて、或親戚に頼んで交渉したけれど、今は火事あとで何とも出来ないとのことでありました。

しかし私は新開業で非常に困つて居る時とて、再び檀那寺の住職に頼んで養家に話をして頂くことにしました。住職の方は口先ではうまく受合つて下さつたけれど、実はそのまま握りつぶしてしまわれました。私は手紙で再三照会して見たけれど、何の返事もなかつた。一度はお訪ねしたけれども要領は得られなかつた。そうして居るうちに或る友人が、そういう法律上の事件は弁護士に依頼しなくてはラチはあかない、知人の弁護士に紹介してやろうと云うてくれました。私は成程夫々専門のある世の中であるから、法律家に頼むのが当然であろうと、その弁護士に平和的に交渉して貰いました。

私はこんなにして人生の苦痛をなめて居りました時、フと信仰の必要を感じました。それは私の今の家庭が、私達

夫婦と子供二人が居るばかりで、老人が居ない。私等の上に立つ者がいないので、互に五分五分の考をもつて云つたりしたりしますから、その結果自然衝突が起こります。それを二人の子供が見習うことになります。つまり親たちの行いを子供が見習い、次ぎには親と子供との間にも、怒鳴声が絶えないという有様で、これが私にはどうも不快でたまらなかつた。「横ざまに逼うて教えた蟹の子に直ぐにはえとは無理な親かな」

しかし妻の母が里から来て居ります間は互に遠慮して居るので、私等の間に比較的衝突が起こる様なことがない。そこで私が氣づいたのは、老人というものも家庭には必要である。しかし今更老人を迎えるということは出来ぬから一つ信仰を求めて、精神上の親を得たならば、キツとよいであろうと思ひました。もとより信仰のない前のことですから、信仰ということが心の親を得るのであるというような、ハツキリした考えはなく、ただ信仰に入れば家庭が平和になるという話を、薄々聞いておりましたので、家庭の平和、子供の教育が目的で、信仰を求めたいという心が起こりました。しかも私自身の煩悶を信仰によって解決したいという考えは出なかつたのであります。

私が信仰を求めたいと思つて居る時に、丁度米国の観光団が別府に来て、劇場で演説がありました。その人達はキ

リスト教の日曜学校の大会に出かける途中とのことで、キツと信仰上有益な話があるうと思つて私も聞きに行きました。その時の演説の要点は、文明の花は信仰の根底があつてはじめて咲くのである。信仰を求めるにはキリスト教の日曜学校に行け、というのであります。

それで私は仏教は未来のことを説いてこの人生には何の光も放たないであろうが、キリスト教ならば必ず私の理想に適合した宗教であろう。何でも新しいもので、ことに西洋から来た文明人の信ずる宗教に限るという考えで、一度その日曜学校を訪ねて見たいと思つて居りました。そうした或日、兄から一通の手紙が来ました。もしこの手紙が来なかつたら、或はキリスト教に入つたかも知れません。さてその手紙の意味は、大工の棟梁をしている渡辺某というもの、病気で別府で入湯しているから、自分の代理として見舞えとのことであります。私は病人が大工の棟梁だから建築上の智識を得ることもあろう、又一つには自分の広告にもなるかと、つまり慾望がさきになつて、病人を見舞いました。話が建築上のことになり、私にも新築しては如何と勧められました。私は無論お金がないから、新築どころではない、おまけに養家との関係も以上の通りですが、そのことも打明けました。すると渡辺氏が、貴方は平和的に交渉して貰うお考えでも、弁護士に依頼すれば、キ

ツと御養家の感情を害します。私の知人に仏教信者で、人の世話をよくする者がいるから、御紹介しましょう、その人に頼まれると、養家との関係はキツとうまく解決がつきますと云うのです。

私は信仰を求めたいと思つて居る時でしたから、仏教信者ということが心に響いて、これは一つ信仰上の話も聞いて見たい、自分はこれまで仏教は葬式道具位に考へて居たけれども、人の世話など熱心にするという信者なら、仏教もこの人生に生きて働くのであろうか。それではこの事件を頼むか否かは第二として、とにかく一度会いたいと思つて渡辺氏に紹介を頼みました。

数日の後、所謂信者という人に面会して、事情を残らず打ちあけて語りました。同氏は養家に交渉してくれましたが、矢張り時機をまつより外に仕方がありませんでした。それからその人は、私に信仰の必要なこと、お慈悲の有難いことを聞かせてくれましたが、一向に私にはわかりません。どうすれば仏様が有難くなりますかと申せば、お寺に再三お参りすれば自然とわかりますとのこと、私はお寺は何となく陰気なようで、心が進みませんでした。参っていたら分るだろう位の考で、とにかく寺参りをはじめました。当時西方寺に日曜講語がありましたから、毎度かさず参つて熱心にききましたが、どうも善いお話であると

いう処まではまいりますが、まだハッキリわかりません。その後僧侶の人に逢って直接お話をきき、どうやら光明を認めた様になりましたが、まだ大安心出来ませんでした。それから清沢満之師の精神講話を読んだり、天本梅可氏の演説を聞いて非常に感動はしましたが、まだ十分慈光が徹底するまでに至らなかった。(入信の困難であったことを申せば長くなりますので略します)

四

そうしているうちに西方寺の仏教夏季講習会に、近角先生が来られて、人生問題及び歎異鈔に就いての御講話をお聞き出来て、初めて大悲の思召に満腹させて頂きました。私は実にこの講習会で、久遠劫からおまじかねの親様に出席させて頂いたのであります。

私が以上申述べた人生問題に苦しんでいる際に、先生にお出逢いして、しかも人生問題及び歎異鈔という御講話をお聞き出来たと申せば、先生のお導きで入信された方は、私の信仰がほおわりになることと思います、先生は私の人生問題をつり出して、これに解決を与えて下さった。歎異鈔という銘刀をもって、煩惱の賊を追ひ払って、私を光明界中にお救い下さったのであります。

時は大正二年の夏、西法寺本堂の左側に、黒板とテープ

そのやるせない汝が見捨てられぬために、この親がわざわざ成就した名号六字である。故にこの南無河弥陀仏一つを受けてくれよ」との親様の思召であった。「円満徳号専称を勧めたまう」。

この時、先生は黒板の上下に線を引かれて、上の絶対界から下の相対界になるところを線、南無阿弥陀仏となされたり、ユッパの水を名号六字の名薬におたとえになつたりして、いとも親切にお説き下された。かくて「大乘無上の法を宣説」されたので、私の胸には何時となく、大悲の暖かいお思召が入りみちて下されたのであります。

その時のよろこびを大正二年九月に書きました終りに、「御講話をお聞かせにあずかって、いよいよ金剛の信心を頂き大安心、大満足、大喜悅、その他何とも申様のない楽しい生活に入ることが出来ました」と記しております。

其他に近角先生は、「信仰は今日の無事を喜ぶことではない」ということ、それから信仰の上に律法主義(努力主義)と退嬰主義(自然主義)のあることを、ねんごろにお説き下さいまして、何処までも善くしなければならぬという方は律法主義、悪いままでよいという方は退嬰主義で、どちらでも絶対の光が見えていないという御教化であった。なかならず退嬰主義をいまして、仏は悪い私をお助けであると、まるで仏が悪い私を助けるのはあたりまえのよう

ルが置かれてある。先生はお念仏を称えながら檀上にいられました。何処からとなく光りが先生のお衣を斜に照らして自然に莊嚴の状を感じられました。昔板敷山の辨円という悪人が、御開山にお逢いした時、聖人に光明がさしたというが、そうありそうなこととおもわれます。さて私は先生のお話を一句も聞きもらさぬように、熱心に拝聴して居ますと、一々が全く私自身の問題をお話になって居られるのであります。私は今、お話の順序などは記憶して居ませんが「人生は何処までも五分五分である。こちらが善くすれば相手も善くする、こちらが不実に出れば相手もまた不実に出る、然るにこちらは何処までも善くしたい、真実にしたいと思うても、相手がそれをうけてくれない場合は、もう駄目となる。つまり相手の不実をうちまかすだけの真実はない。故に人生は何処までも相対的である。人生は皆それで苦しんでいる」というお話であったが、私も実にその通りであった。

自分は善くして居るのに、養家は一向構うてくれない。師長に対しては済まぬことが出来た。妻に対しては自分の考えはよいが、妻はいけないのだという、つまり五分五分の考えより外はない。師長に奉事することも出来ない。その他戒・定・慧(かい・じょう・え)の三学も及ばない。「善くなりたい」と願いながら善くなることの出来ぬ、

に思っているから、トンダことになる。それでは悪い私と仏の思召とが出違いになっている。それではお慈悲を有難いと思ひながら、悪いことはやまない、これがまあ一般の信者に多いようである。仏のお慈悲はお慈悲、悪いことは悪いことと、別にして居るから大間違ひになる。悪うても大事な、悪うてもおたすけ、それではいけない。お慈悲のいただきようがまるで違っている。

この助かりようのない罪惡深重、煩惱熾盛の私をお見捨てなく、それが可哀想であるという仏のやるせない思召一つをよくいただかなくてはならぬ、「いずれの行にても生死をはなれることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意」を頂けとのお話である。

それからお譬に、天災地震の時に、陛下のお恵みをあたりまえのように思っているのは大変な間違ひであると同時に、そのお恵みを遠慮してお受けしないのはまた思召にそむくわけになる。仏のお慈悲に対しても、それと同じことであるというようなお教えを頂きました。

私は最早、仏の誓願不思議を信ぜざるを得なかった。弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとくるなりと信じて、念仏申させて頂くことになりました。善ければ採る、悪ければ捨てるというのが世間の常であるのに、仏は私の善くなれん、悪のやまぬこと、五分五分で苦しむ

つつあることをかねてしろしめして、それをあわれとある
広大な慈悲であります。善くなりたくても善くならぬ罪
業の私、人生においてますます冷却されつつあるして見よ
うのない私を、お見捨てのない御本願「さればそくばくの
業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたち
ける本願のかたじけなきよ」と頂かせて貰いました。

その後は不思議にも今まで苦しんで居った問題が自然に
解けてしまいました。養家に対する要求がなくなつて、む
しろ養家に対して物質的の欲望をもつて居ったのがお恥か
しく、否馬鹿々々しくなりました。相続権というようなつ
まらぬものに執着して居った夢がさめてしまいました。こ
れまでは時機が来るまで諦めようと思つておりましたが
今はその考えもなくなりました。

それから師長に対して済まなかったことを苦にして居つ
たのも、罪業深き汝故に見捨てぬ「たとい罪業は深重なり
とも、我をたのまん者は必ず救う」とある広大の思召に満
足させて頂き「よきこともあしきことも業報にさしまかせ
てひとえに本願をたのみまいらする」ことになりました。

思えばこれまで永い煩悶懊悩してきたことも、今日では
実に意義あることになったのであります。

繰りかえして申すようですが、善ければ採る、悪ければ
捨てるは世間の常であるのに、悪くて困つて居る汝が、こ

とに憐れで捨てられん、とあるのが、実に超世（ちよう
せ）の本願、ここ一つを近角先生によってよく聞き開かせ
て頂いてからは今まで冷たい人生の方面のみを見て居った
私が、あたたかい大悲の方へネジ向けられて、ただもう一
切うちまかされてしまい、善もほしからず、悪もおそれな
しという安心な身にして頂きました。

ことの葉にあげてかたろうすべぞなき

深さしらぬ弥陀のみぐみは

さて信仰の上から私の過去をかえり見ると自然に人生が
有難く味わるると同時に、同じ煩悩の暗に居られる人々、
或は嫁姑、夫婦、親子等の關係に苦しんで居られる方や、
或は病苦、生活難等の人生問題に苦しんで居られる人々は
是非よく聞きとつて頂きたい。

また折角信仰に氣づかれた方でも、仏に現世利益を交換
的に要求する人もあり、単に仏を崇拜し、仏教に賛成して
居られるまでの方があつた。更に真宗門徒の中に、仏意にか
なうべく努力して居る人や、このままのお助けとすまして
居られる向きもある。ある方面では一種の道楽に法を聞
き、また種々学問理屈をならべている人々もある。皆絶対
の光のとどかない状態である。

私は呼吸器病を専門として居るところから重症の患者が

秀存師語録

信のいただけぬものは明師にあわざるが故なり。小言の
つきぬのは聞きようが足らぬ故なり。

これで浅間しいの、あれで浅間しいのというような者で
はない、まるきり浅間しいのじゃ。このまるきり浅間し
いまで助けて下さるとの仰せなら不足も小言もいひよ
うがないではないか、これがやがて信というもののじゃ。

明信寺の云く。善きも悪しきもわがためとなれば、外へ
はやらぬ也。信を得たる人は、人の善きも、わがためな
り、人の悪しきもわがためなり。皆我方へこけこみて、
喜びの縁となり、或は意見となると。これにて思い当る
宿かさぬうらみもはれて野辺の月

滝女云く

今までこの心では如何とおもうたは、七八才もなりた子
供が、わが臍の脇にある慈（あざ）を親にかくして居る
がごとし、親はうみ落したる初めよりよく知つておる。
我等が浅間しき心を阿弥陀さまに面目なく、今日までは
かくすようにしてきたが、仏はもとより我等が知らぬさ
きから御存じなり。

大正五年五月 「求道十三卷、三号」

仏をたたえて

麻生 介

世にこえてたえなる法はただ弥陀の

よしあしとわぬ誓いなりけり

虫の音もしずまりはてしまふやかに

おのずからなる弥陀のよび声

年々にふりゆく身にもたのしきは

聞きひらきたるのりの初花

うきくものたえまにもる月かけに

みだのさとりをしのぶ夜半かな

ありがたや仏はかねてしろしめし

見捨て給わぬおぼしめしとは

松のかけいずみありとはみえねども

ふきくる風は水けふくめり

アメリカの仏たち (二)

西 元 宗 助

フレズノ市は加州の中央にあって、ここにフレズノ別院があるが、その管下のセルマという小村の山下一郎翁の宅に数日泊めていただいた。

同翁の宅は、四面みわたすかぎりのぶどう園のまん中にある一軒家屋、そして、その家屋のまわりにはクルミの大木が四、五本あって、そのあたりには野兔が、ピョンピョンはねまわっているなど、まるでお伽話に出てきそうな百姓家である。尤も百姓家といっても、暖房設備があり、立派な応接間もあって、私の宅などよりはるかに上等。

さて、山下翁にお会いするなり、一見旧知のような親しみを感じた。そのお顔は内なる喜びが顔一杯にあふれていられる。それに、にこやかに口数の少ない奥さんが一層よい。若いときに、日本からアメリカに渡って数十年、苦心さんたん百姓仕事をして漸くぶどう園の経営者になられたが、よる年波には勝てず、これらを手放して、これから隠居するところだとのこと。

応接室には、立派なお仏壇があって、傍らには故京極逸藏先生のお写真がかかけられてある。山下翁に、どの先生から一番ご教化をうけられましたかとお伺いすると、即座に、京極先生。そして故羽栗行道師にも、とお答えになる。

カルフォルニア州の、特にフレズノ地方における日本人仏教―浄土真宗をかたる場合、どうしても京極、羽栗の両師のことにふれなければならぬ。まず大正時代の始めに羽栗師が開教使としてフレズノに駐在され、師独特のご示談中心の熱烈な布教によって、信火はフレズノ地方に燃えあがった。そしてそのため、たしかに信仰熱はたかまっていつたが、しかし他面において一念覚知的な、入信したとか、しないとか、多少の弊害が生じないでもなかった。じっさい、よきにつけ、あしきにつけ、その感化影響は今日もなお残っている。

ところで、京極先生は、そのあとに開教使としてこれらその博い教養と堅固たる信念をもって、浄土真宗は仏教で

あること、仏教の極致は真宗であることを力説して、従来のどちらかといえば偏狭な閉鎖的な信仰にたいして、開放的な明るい仏教を鼓吹し、殊に白人に対する伝道布教にも努力されたことは注目し得る。そしてそれはやがて、北米仏教団への指針ともなっていた。

なお、京極先生は東大英文科の出身で、金沢の四高時代には西田幾多郎博士の感化を、ついで暁島敏師に深く帰依されて、著者に「明るい仏教」があるが、先生六十六才を一期として逝去されたのは、まことに惜しい。しかし京極先生の未亡人清子夫人と、その令嬢のユリさんはご健在でコロンバス市に住んで、今なを仏教信仰の普及に努力しておられる。昨年の六月三十日、クリーブランドの仏教会を訪れたとき、その開教使であるユリ女史から、信徒の方々と共に、たまたまその日が私の誕生日であったのを知られて、お祝いしていただけたのは忘れがたい。それにしても、高血圧のため遠出のできない京極夫人のお見舞いのできなかったことは、今もなを深く悔まれる。

ともかく京極逸藏先生の感化は頗る大であって、その帰依者はこの山下翁だけではない。こんにち、アメリカ仏教団の在家信徒側の教団理事であり、かつ仏教講演にも多忙な二世の平医学博士も亦京極門下である。

それはともかく、山下翁の宅にとまっていたある朝、前

夜おそくまでの座談会に疲れきった私は、朝寝坊をきめこんで、まだベッドに横たわったままにいたが、隣りの応接間では、すでに山下翁を中心に、もう数名の信者の方々が集まって話をしておられる。そのお話を聞くとはなしに聞いていると、山下さんが「みんな、よくお聞きしなければいけません。このたびセイセイがはるばると日本からこられ、そして特にこのフレズノの田舎にまで来られたのは、全くこれは、わしらのため。まことの信心をいただくということは容易ならぬこと。それなのに、わしらはともすれば、入信したの、せんのと、人さまの信心の品さだめばかりして、自分は天狗になって信心のあるつもり。そしてわしに、そのあげくのはては開教使先生をおろそかにする。そんなクセのあることをサンノゼの北条恵実先生やこちらの木村先生らが心配されて、それでとくに、そのようなご経験もおありなさる、それでワシらの気持もよく分かっていくだるセンセイにきていただくことになったそう。だから、よくお聞きせなにかん。ありがたいことじゃ」と仰せになつていられる。わたしは思わずベッドの上に坐りなおした。

このような経験は必ずしもセルマの山下翁宅だけのことでなかった。たとえばサクラメントでもロサンゼルスでも。

ここに注目すべきことは、熱心な信者ほど、すべてなんらかの意味でかつては、羽栗師の系統の教化感化におあいになった方々であった。ただ辺地であって熱心のあまりにどこかに遍執したもののある方々が時折みうけられた。しかし、これらの方々こそが、一番真面目でありになつてしかもよく聴聞しておられただけに、私は考えさせられもした。ことに、アメリカの日本人仏教が漸く社交仏教に墮してしまおうとしている昨今であるだけに、私にとって縁のなかつた故羽栗行道師のアメリカ真宗史上における歴史的意味を再評価する必要のあることをあらためて痛感したものである。じつさい京極先生の仏教伝道も、その後の北米仏教団の発展も、羽栗師などによる信の開拓とその土壌があつたればこそ開花したというも必ずしも過言ではないから。

○ ○

なお、アメリカのあちこちに、尊い当来^{ようらい}の仏さまたちが沢山おられる。それはあたかもカルフォルニアの野原に咲き乱れているポピーの花のように。

そのなかのお一人を、たとえにあげてみればスタクトン近郊の浅井静香さん、この可愛いおばあちゃんの、その静かな香りは、今この小文を書いていても、ここまで、におってくるようである。ここにお名前を一々おあげするこ

歎異鈔 第四章

①慈悲に聖道、浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものをあわれみかなしみはぐくむなり。しかれども思うが如くたすけとぐることきわめてありがたし。

②また浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいうべきなり。

③今生にいかにいとおしふびんと思うとも存知のごとく助け難ければこの慈悲始終なし、しかれば念仏申すのみぞ未徹りたる大慈悲心にて候うべきと、云々。

この章によって、人と人との間の親切とか同情とか愛情などが、仏の智慧に照らされてその限界を知らされるとともに、仏の大慈大悲によって、そのうつろさが満足せしめられて、人として無理のない自然の道がひらかれてくる。

とのできなかつた方々を代表して、このおばあちゃんのお名前をあげた次等、失礼おゆるしくたさい。なお前記山下翁は今春、お気の毒にも中風で倒れ、再起おぼつかないとお便り、まことに哀傷の感にたえない次第である。

おのれのくさみ

昔々、清き泉のむくむくと湧き出ずる別荘をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒のまわりに覆におおいを作りて、つらつら年をへたりける程に、いつしか垣も朽ち、水も悪くなりて、茨おどろおのがさまさまにしけりあい、ボウブラところ得がおにおどりつつ、ついに人しらぬ野中の埋れ井とぞなりける。

此道(俳諧)にころざすもまたさの通り、よりより魂のかびを洗い、つとめて心の古みを汲みほさざれば、彼腐き俳諧となりて、果ては大さえも喰らわずなりぬべき。されどおのれが水の嗅きはしらで、世を恨み、人をそしりてゆくゆく理屈地獄の苦しみまぬかれざらん。云々。

信濃の国、乞食首領、一茶。

花田 正夫

まず第一節で、

①慈悲に聖道、浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものをあわれみかなしみはぐくむなり。しかれども思うがごとくたすけとぐることきわめてありがたし。

と、聖道の慈悲は、自分の力をもととして、飽くまでも人に親切を尽くしてゆくのであるが、この道は、外に色々の障害があり、内にも無尽の煩惱にさまたげられて、やがて行き詰ってしまい、何処までもたすけ遂げることというものは仏や菩薩方をのけてはほとんどありえぬことを知らされる。それというのかわれわれ煩惱具足の身で人に何か親切なことをした場合に、自分はいいことをしたという思いが必ずのこるもので、これが禍いしてやがて不平不満となり、切角積んだ功德の法財も瞋恚の焰で焼いてしまう。それでは、善いことをしたと思わねばよいといっても、煩惱興盛で執着の強い我々には不可能である。ただ煩惱のわざわいから解脱して無我の徳をもった仏や菩薩ばかりが能くさ

れるところである。

道綽禪師はその消息を次のような喩で教えられる。

「老母が二人の子に付き添われて橋を渡っていた。時は雨期で濁水が川一杯に激しく流れていた。ところが老母がつまずいてころび、その川に落ちこんだ。兄はこれを見て着のみのまま投ひこんで母を救おうとしたが、生命がけになって母がシガミついたので泳げず、二人は浮きつ沈みつおぼれた。これを見た弟は川岸へ走って、そこにつないであつた小舟を漕いで二人に近づき無事に救いあげることが出来た」

この兄の態度が聖道の慈悲で、弟の沈まぬ舟を得て共に救いとける道が浄土の慈悲であると説かれている。親鸞聖人は正信偈で「道綽は聖道の証し難きを決し、唯浄土の一門のみありて通入すべしと明かしたまう」と、道綽禪師がそのことを身をもって証明されていることを述べていられる。

次に第二節で

②また浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいうべきなり。

と浄土の慈悲を説かれている。「念仏していそぎ仏にな

衆生利益であるということになることではない。飽くまでも仏の本願の不思議な力のひとりばたらきである。言い換えると、私をお救い下さる仏は、私の有縁の人々をも必ず捨てられるはずはない、私一人のために御苦勞下さる仏は一切衆生の一人一人のために御苦勞して下さるのである。私共はその御力を信じて、その事実を有縁の方々におつたえするばかりである。それを知らずに、孤独をかこち、罪業に苦悶し、救いのないところに光を求めてさまよい、頼むべからざるものをたのんで、はては絶望の淵に沈む私共の故に、この救いなきところに救いの船を浮かべて下さる方の御恵みを頌かちあわずには居られないのである。

弥陀、観音、大勢至 大願の船に乗じてぞ
生死のうみにうかみつつ有情をよほうてのせ給う

更に、往生と共に、「仏となりて思うが如く衆生を利益する」ということ、所謂昔から還相廻向の徳については前に述べたように、現在云々することは出来ないが、私は現に、法然上人や親鸞聖人の御導きをうけて、不思議にも念仏申させていただいている。そこに聖人方の上に、弥陀仏の智慧と慈悲のひらめきを仰ぐことが出来る。即ち法然上人は仏の智慧をつたえて下さるので勢至菩薩、親鸞聖人は

る」ことによって、仏にそなわつた大慈大悲の力をもって思いのままに行きつまるということもなく、あらゆる人々をして仏のさとりに導き入れることが出来るのである。「思うが如くたすけとける」ことの出来ない我等をたすけとけて成仏せしめて下さるばかりでなく、有縁の人々をのこらず「思うがごとくたすけとける」ことの出来る身にして下さるのである。

さてここで「いそぎ仏になる」という意味が、私にわかりにくかったが、それは「凡夫が仏のさとりを得るには、本願を信じ念仏させて頂くことが、最もすみやかな道である。阿弥陀仏はそれを誓いを建てて保証して下さるので、念仏成仏の道を早作仏の法といわれる」と聞いてはじめて水解した。

次に私の問題となつたのは、それでは往生成仏するまでは、言い換えると現世では何の働きもないのであろうか、ということであつた。これに対して聖人は「現生に十種の益ありとあげられ、その一つに常行大悲、常に大悲を行ずることがめぐまれるとあつた。浄土に生れて思う存分の活動が出来るとあつても、現に娑婆に凡夫の身をもつ私にはそれをうかがい知ることが出来ないけれど、この常行大悲の一つは現世からめぐまれるのである。

しかしそれは、自分は念仏の玄意に徹した、これからは

仏の慈悲をとどけて下さるので観音菩薩の徳光を直き直きに感佩している、しかも両菩薩ともに浄土から還相して下さる菩薩である。そこに両聖人を代表として現に浄土から還相の方々の無限のお導きを私は蒙っていることは、疑う余地のない生きた事実である。して見れば、私共もまた聖人に導かれて浄土に生まれ、仏の光明界裡に入らせて下さるとき、聖人方のような還相の徳も必ずいただけるものと信じている。

終りの節に

③今生にいかにかいとおしふびんと思うとも存知のことく助け難ければこの慈悲始終なし、しかれば念仏申すのみぞすえとおりたる大慈悲心にて候うべきと、云々。

と結ばれている。

花田先生の伯父さん

私に本鈔を勧めてくれた伯父は、自分が幼い時家庭的に恵まれなかったことと、わが子が夭折したことが機縁になつて、孤兒院の世話やら、重い眼病の人のために悲眼院をおこしたりなどしていたが、家庭を中心を考える伯母と意見があわず、そこに外では賞められながら内では何かにつけてもめ事が続いた。そうした矛盾に行きなすんだ挙句、近角先生や足利浄円師から念仏の教えをうけて、はじめて光明を見出し、医を生業としながらも社会事業に一生涯尽

瘁し続けた。

次に池山先生は、明治三十年頃ドイツで労働問題を研究し、「働いても働いてもわがくらしの楽にならない」労働者のために、組合をつくり労働福祉の道を開こうと願われたけれど、当時の日本では民衆は誰も耳をかたむけようとしなかったので、苦学生を集めて、次の世代にのぞみをかけるなど苦勞されたけれど、事業は失敗となり、病氣にもかかるという状態になられた頃、近角先生等の奔走で、六高のドイツ語の教授になられた。その頃から自己省察が段々とすすみ、自分の志した社会福祉の仕事は大切で必要であるが、それを実行しようとした自分自身は、名譽を求める心で一杯である、真実の善など思いもよらぬことであつたとなつて大苦悶におちられた。そのはてに四十二歳の時、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、とよき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の一文がふと浮び「地獄一定の聖人がよき人の仰せ、ただ念仏してであつたのか」とうなずかれると共に、念仏の人となられたのである。

近角先生もまた、宗教のため、友人のためと真剣に努力された挙句、そのむくいられないにつけ不平不満となり、さらにそうなる自分が虚偽不実であつたと気づかれて、大煩悶の数ヶ月を経て仏の慈悲にかえり、わが最大の良友は

い枕頭であつた。大正十四年の三月下旬、私が岡山医大に入学出来た時、父の病の重いしらせを受け、二週間程つきっきりの看護をした。

然し父の病勢は日に悪化し、衰弱は目に見えて増し、お願いした医師の方々から、恢復のすべのないことを告げられた。それから日ならずして遂に昏睡状態におちた。それまで、脚が痛いとか、起こせとか、寝がえりしたい等々と色々と苦痛を訴えていた間は、そのことにかかり果てて考える暇もなかったが、サテ何も云わなくなり、こんこんと眠り続け、呼吸も脉膊も段々と弱り、刻一刻と死が迫つて行く父を前に、何一つどうすることも出来ない私に、
「今生いかにおしふびんと思うとも存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし」
の一句が心に浮んだ。そして親鸞聖人の温いお心が

「親じやもの、子じやもの、なんとかしたいだらう、無理ないことだ、また出来るだけのことは皆しているのだが、力に限りのある身には、現在の病氣をどうすることも出来ないばかりでなく、ひとり淋しく死んで行く親の心の闇をひらくことも出来ないのだ。いかにも残念であるう、やる瀬ないことであろう。仏はこのことをよくしるしめて、大慈大悲のみ心から念仏成仏の浄土の大道を、こうした我々のためにひらいて下さったのだよ」

仏であつた、と慶喜されたのが二十九歳の秋であつた。

人がもし理想主義に立ち、それを実行しようと真剣になれば必ず、自分がそうならないことに行き詰る。そのどうしてみようもない、冷酷無慈悲の身に、本願の大慈大悲の御手はさしのべられているのである。

しかし病氣すれば治りたい治りたいの一杯になつて、八方手を尽すのは当然であるが、治るとばかりはいかぬ。入院患者が一応恢復して皆から祝福されて退院するが、その中幾人かは裏門から金色の自動車で静かに消えて行く。けれども自分がそうなるとは思えないし、また思いたくもない、というのもそこはあまりにも暗く、あまりにも冷たい、一切の光はかき消されて、凝視するに堪えられないからだ。しかしこのよくならない者、どんな手もとどかないところにとどいて下さる光が阿弥陀仏の無碍光であり、大慈大悲の御手であると気づく事も少なく、そこに満足する事はなほ稀れであろう。その死を正視し得るのは、仏の大慈大悲心に満たされ、無碍光に照護されてはじめて可能である。しかもこの道以外にはこの問題は、何時まで経っても、何処まで行つても、真の解決はない。

私はここで、私のわずかな経験を述べよう。

この章が私の身に強く沁みはじめたのは、父の臨終の近

と直き直きにしみこんで、当時何もわからぬなりにも覚えず念仏を称えながら父との別れを惜しんだ。

次に、昭和十三年末、池山先生が亡くなられた頃から私自身が肺浸潤で高熱が続き、血痰まで出るようになって絶対安静が続けていた時、家族をはじめ、友人知己の温いみとりをうけながらフト思ったことは、

「自分は現在、艦も舵も失つた小舟で暗い沖に押し流され、暴風と波浪に浮きつ沈みつただようているが、海浜で多くの人々が手に手に灯火を高く掲げて、声を限り喚びかけてくれている。それはよくわかるし、ありがたいことであるが、所詮今の自分には何の力とはならない、一度大きな横波でもうけるとそれまでで、自分には何一つたよれるものはないんだ」

となつた時、聖道の慈悲の手のとどこかぬ身を知られると同時に、お念仏が口をついで申されてきた。

その念仏は外からの声でなしに、何一つたよりにならない暗い淋しい私の心の底から浮かんて来る念仏であつた、それは私とひとつにとけて、内から浮かび出る念仏であつた。

「しかれば念仏申すのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候」

の一句をあたらしく生き／＼と味わいはじめた。

以上私のいささかの経験を述べたが、孔子が「学んで習わざれば惑い、習いて学ばざれば暗し」と云っているように、学んだことも実生活の上で習わないと、いざという時にうろろと惑うし、実生活ばかりを重んじても先覚者の教えを学ばないと、独善の狭く暗い洞窟から出られない。私共は先ずよき人、聖人の仰せをよく聞いてみると、実生活の場で、その教が実地に体験せられて、はじめて自分の身についてくる例として読んで貰えたらものつけの幸である。

求道用心集

源通寺

どうしても、こうしても、云うことを聞いてくれぬ奴じゃと云うことの知れるまでよく聞くのじゃ。その心の鬼に勝ちたいという料簡ならあやまりというものじゃ。

心こそ大敵。この機は何処までも聞いてはくれぬ。また聞いてくれたら大変じゃ、御化導がウツになる。万劫の仇じゃもの、聞いてくれたらそれにたまされて、おそろしい

ことじゃ。定散心まじるが故に、出離その期なしじゃ。聞いてくれぬ故、いよいよ、ただたのむべきは弥陀如来なり、ということを知らせて貰う。

湖北稻葉の妙意が「この心の金輪際聞いてくれぬということのハッキリ知れるまで聞くのじゃ」は妙言じゃ。

いよいよおつるばかり、助けられるばかり。聞いてくれぬ故、おたすけ間違いなしじゃ。

十九願、二十願は、たすかりにかかるのじゃ。

十八願は、助かりたい気のない逃ぐる奴、嫌う奴を手段にかけて、思いがけなくせしめらるるのゆえ、嬉しいからうはずはなけれども、弥陀の手くだにかりてみれば、我が機様（きさま）と法の尊さのありのままが見える故、おのずから恐ろしや、嬉しいやなり。

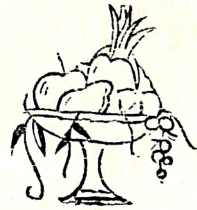
○ 天津波に残るものは天上の月一輪。仰せが仏法なり、聞いた心が仏法ではない

○ 法照禪師、文殊菩薩に逢うて

「只今我身に相應の法は何ぞや」

「まさに念仏すべし、今是れ時なり」と

あ と が き



唱して下さる。親鸞聖人は「菩薩の仏に帰して進退も出沒もおのれにあらざる」趣を常に体得されて、その徳光が言々句々にあらわれている。我も人も真我を見失って、雑草の中に混迷している時、両聖の教を共に身にうけたいものである。

○ 東京の藤田正直様から「家族の友」の昭和六年三月号の送呈をうけ、そこに近角先生の「信仰の悦び」を拝読し、早速本誌に頂きました。

次に「求道誌」の中に、麻生介様の懺悔録を見出しましたので、この期に本誌にいただきました。人の体験録は聖典であるとか、つて聞いたことがあります、教えられることの多いものであります。

西元宗助様は、本年夏はハワイの仏教団から特請をうけ巡講される前の忙しさの中に原稿を頂きました。北米の念仏者の歩みの一端を知らされ、我々の歩みをも種々省みさせられますことであります。

御案内
○日曜例会。第一、二、三日曜午後一時半。一大会館。市電、新郊通り一丁目下車。名鉄、呼続下車。国鉄、笠寺駅下車、市電乗換え。
○教西寺法話会。毎月二十四日午前午後。市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。
皆様に御心配おかけ申して居ります私の病状もお蔭様で安定して、九月から日曜例会をはじめさせて頂きました。御礼を申し上げます。

誌友の一人から「心情園」を贈られ、岡潔さんの文を拾い読みしていると、
「氣ままそのままで自分では個性を出していると思っていますが、これは実は、我執と個性とを間違えている、我執をとらなければ個性は出てきません。今、自分と自分と想っているのは雑草です、毒を含んだ雑草を刈り取らずにそれを個性と言っているのです。今はだから個性が出ていやしません、無明でぬり潰して個性が出ていない」
「小我という自己中心の本能が現れて、その小我を自分だという迷いをさまして、真の自分（真我）を自分だと悟らねばなりません云々」
とあった。蓮如上人は終始一貫して「仏法には無我にて候」ときびしく誠められ、我執の雑草を払って、無我執の信生活を提

京都一国会御案内

十月二十七日（日曜）午後一時。
京都市右京区山田開町、浄住寺。京都駅より苦寺行きバスにて終点下車。又は新京阪、桂乗換え、上桂下車。

定価 半年 二百五十円（送共）
一年 五百円（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ八八
編集・発行人 花田正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 吉野穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番